

Pour Néant

Fumitaka Nakamura

Bass Recorder: Fumitaka Nakamura

作品解説:

“Pour Néant”は英訳すると“For Nothing”である。つまりこの作品は何かのために書かれたのではない。

システム図は下の通りで、Bass Recorder の演奏をマイクで拾い、6 系統の並列ディレイをかけているだけである。6 系統のディレイは 0.1 秒から 3 秒までのそれぞれ異なった遅延時間を持ち、フィードバックレートを 40% である。演奏を遅延させる以外の処理はまったく用いていないので、原理的には数十名の Bass Recorder 奏者がいれば生演奏のみで実現することも不可能ではない。

Bass Recorder のパートは作曲者自身の即興演奏を採譜したものが用いられているが、実際の演奏時には即興も加えて行われる。特殊奏法もいくつか用いられているが Recorder 独自のものというわけではなく、主にフルートで開発されてきた奏法を流用している。フラッタータンギング、Bass Recorder で採用されている吹込管の歌口でバズィングを行うトランペット奏法(Tenor までのリコーダーでは歌口の構造上難しい)、声帯で発生しつつ吹奏する技法(吹奏音と近い微分音程を歌うことでリングモジュレータ状の効果を得られる。また、和音の演奏も可能である)、ブローアップによる重音奏法、ホール・スラップとキー・スラップ(Tenor より低い音域の Recorder ではキーをもつものがある)、キー・ノイズ、がこの曲で用いられる奏法である。Recorder の中でも Bass Recorder を選んだ理由は、上記のように吹込管をもつことや、得られる倍音の豊富なこと、キーを持つため、キー・ノイズを音源として使えること、など、音源として面白いことである。本当は更に低い音域のコントラバスリコーダーを用いたかったのであるが、経済上の理由から断念した。

Kyma の能力があれば、リアルタイムに演奏音をサンプリングし、加工し、演奏音を用いたトリガや楽器自体に細工を施したコントロールデバイスの制作も可能であることはもちろんであるが、このようなシンプルなシステムで楽器の魅力を引き出すことに挑戦することも面白いと思った。

